田宏君を偲ぶ

――遺文・遺詠ならびに追悼文・献詠集――

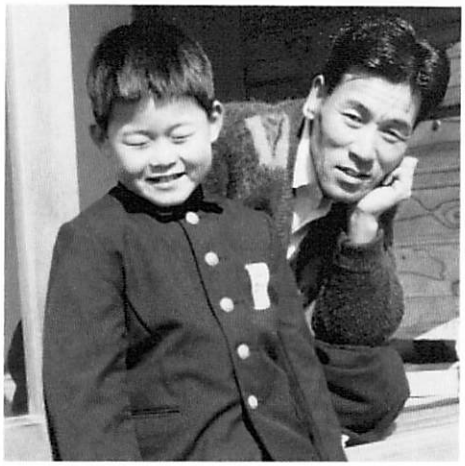
皿田宏君を偲ぶ

——遺文・遺詠ならびに追悼文・献詠集——

ますらをのかなしき
いのちつみかさねつみ
かさねまもるやまとし
まねを

三井甲之先生詠

吉川書



今宿小学校時代　父上と

今宿幼稚園時代　近所の公園で

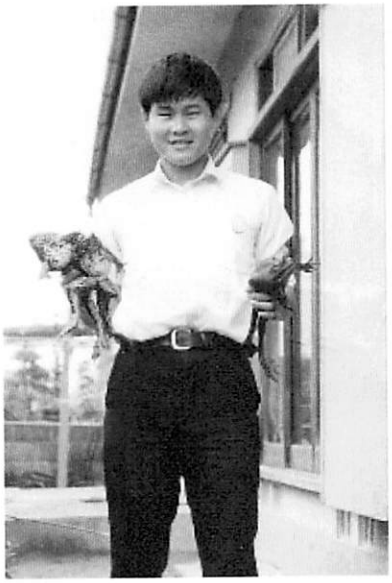
住吉中学入学記念写真

小学校卒業前の学校旅行

小学校時代　島で海水浴

県立徳山高校二年生の雄姿

【右の写真】お母様からのお話。
中学三年生。
近所の沼で、食用蛙を釣って家へ。料理してほしいと宏君。
お母さん「駄目」と。
近所の友人の魚屋さんでさばき、夕食に天ぷらにして、「おいしい、おいしい」と言って一人で食べたとのこと。



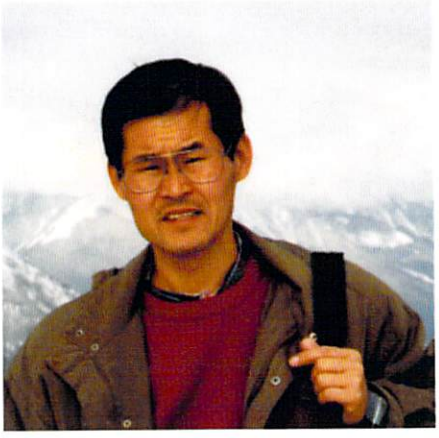
シンガポールにて(昭和 62 年 5 月 2 日)

シンガポールにて(平成 3 年 5 月 11 日)

シンガポールにて

カナディアン・ロッキーにて（平成 7 年 4 月 27 日）

カナディアン・ロッキーにて（平成 7 年 4 月 27 日）



カナディアン・ロッキーにて（平成 7 年 4 月 27 日）

目次

一　はじめに　……1
二　皿田　宏君の略歴　……3
三　戒名　……4
四　ご遺族からのお言葉
1．皿田美穂子様　喪主挨拶文(平成八年四月三十日)　……5
2．皿田美穂子様より大町へのお便り（平成八年六月十六日）　……6
3．ご母堂をご訪問して（お聞きできた皿田兄の思ひ出）　……7
五　遺文・遺詠と先輩からの感想
1．昭和四十九年大合宿（霧島合宿）遺詠　……10
2．昭和五十年問題提起文（久留米合宿）遺文　……10
3．昭和五十年（久留米合宿）遺詠　……11
4．昭和五十年（学生研究会）遺詠　……12
5．昭和五十年　書簡　東工大歴生会大原合宿報告への便り（六月二十二日、二十三日）（奥冨から大町宛の抜粋）　……12
6．昭和五十年　第三回学生研究会報告　十二月六日　於　正大寮　遺詠　……14
7．昭和五十年　東工大歴生会水戸大洗秋合宿記録集「学びの道第六集」より（十二月十三日、十四日）
7―1　昭和五十年　巻頭言　……15
7―2　昭和五十年　歴生会合宿における研究発表「短歌について」遺文　……15
7―3　昭和五十年　書簡の一部（前掲の皿田論文「短歌について」の感想‐奥冨から皿田兄へ）　……17
7―4　昭和五十年　和歌相互批評　……17
7―5　昭和五十年　合宿感想文　……18
8．昭和五十一年　東京地区問題提起文　「日本史教科書を読んで」　遺文　……18
9．昭和五十一年（春季持経寺合宿）春季合宿（大阪・持経寺）記録より　遺詠・遺文　……19

10．昭和五十一年「正大寮短歌通信」（五月十四日）より　遺詠・遺文……20
11．昭和五十一年「正大寮短歌通信第三号」（十月十五日、於新宿共益ビル二階電発社友会）より　遺詠……20
12．昭和五十一年十二月十八～十九日　歴生会秋合宿「学びの道」第七集より　・
12―1　昭和五十一年　家永三郎著「検定不合格日本史を読んで」……21
12―2　昭和五十一年「奥冨先輩発表要旨」……22
12―3　昭和五十一年　短歌創作……23
12―4　昭和五十一年　宿感想文……24
13．昭和五十一年十二月「正大寮通信」より　遺詠……24
14．昭和五十二年（春季宮地嶽合宿）春季合宿（福岡・宮地嶽）記録より　遺詠……24
15．昭和五十二年　東工大歴生会新人勧誘ビラ（巻頭言）……25
16．昭和五十二年　雲仙合宿感想文と歌　遺文・遺詠……26
17．昭和五十二年　東京地区秋季合宿記録集「ますらを」（十一月五日～七日、神奈川県・三浦海岸）より　遺詠……27
18．昭和五十三年編集「講孟余話」輪読感想文　遺文
18―1　昭和五十二年九月六日「母雛の専精」を輪読して……28
18―2　昭和五十二年十月二十五日　「聖人純金の説」を輪読して……29
18―3　昭和五十二年十一月九日「性と知」を輪読して（その一）……29
18―4　昭和五十二年十一月十六日「性と知」を輪読して（その二）……30
18―5　昭和五十二年十一月三十日「大節と学問思弁」を輪読して……30
18―6　昭和五十二年十二月七日「英才の教育」を輪読して……30
18―7　昭和五十三年「講孟余話」輪読会感想文集の　あとがき……31
19．昭和五十三年東京地区秋季合宿記録集「御嶽」　遺詠・遺文……31
20．昭和五十三年　十一月九日の正大寮日誌より（須田清文君筆）……32
21．昭和五十四年　霧島合宿　遺詠……32

22．昭和五十四年　慰霊祭献詠歌　遺詠 …… 33
六　皿田兄から大町へのお手紙（平成六年六月二十四日） …… 34
七　友よりの皿田　宏君を偲ぶ追悼文と献詠
1．元電源開発（株）、元開発電子（株）取締役　青森市　長内俊平（九十歳） …… 36
2．東急建設（株）元常務取締役　川越市　奥冨修一（六十四歳） …… 38
3．元宇部興産（株）　ＳＩＳ㈱　宇部市　内田厳彦（六十五歳） …… 39
4．ＳＥＷＳ―ＣＡＢＩＮＤ社　社長　在イタリア・トリノ市　布瀬雅義（五十七歳） …… 42
5．元ＪＴＢ伊勢営業所所長　岡崎市　松藤　力（六十歳） …… 43
6．（株）イオンフォレスト　ザ・ボディショップ　取締役　東京都　古宮良英（五十六歳） …… 43
7．興銀リース（株）執行役員　東京都　小柳志乃夫（五十四歳） …… 44
8．秋田県　羽後信用金庫　由利本荘市　須田清文（五十五歳） …… 46
9．New Dynamic Asset Management Pte Ltd　Director　東京都　小田村芳忠（五十四歳） …… 47
10．㈱ＩＨＩエアロスペース　千葉県印旛郡　内海勝彦（五十五歳） …… 49
11．（株）三井三池製作所（東洋精密プレス）　伊勢原市　阿川信次（五十三歳） …… 50
12．日本ユニシス（株）担当部長　札幌市　大町憲朗（五十六歳） …… 50
13．元富山工業高校教諭　小矢部市　岸本　弘（六十五歳） …… 52
14．熊本市役所　熊本市　折田豊生（五十九歳） …… 53
八　「あとがき」にかへて …… 54

一　はじめに

大町憲朗

平成八年四月二十八日　皿田宏兄が亡くなられた。私は、特に皿田兄とは、不請の友ともいふ関係にあったと思ふ。彼の文章、歌を遺稿集として、とりまとめようと、葬儀の後、歴生会の諸先輩と相談し、私が発起人として手をあげた。すぐ奥様にお願ひし、喪主挨拶の文もお送りいただいた。

以降、私は、日々の仕事にまぎれ、遺稿集の編集に取り組むことができなかった。そのことを時を経過するたびに、無念と後悔の気持ちを持ち続けてゐた。ひとたび、気持ちがなえると、本当に立ち上がることができない。無念の日々が続いた。

平成二十一年、五十歳をすぎ、自分の大切なもので何を残せるか、仕事にまぎれることなく考へるやうになった。国文研の先輩も、札幌に来られるたびに、声をかけてくださった。各々の先輩と、二、三時間程度であったが、再会したことも手伝ひ、平成二十一年の国民文化研究会の夏の合宿（厚木）に二十三年ぶりに参加した。そして、平成二十二年、阿蘇合宿にも参加することを心に決めてゐた。

私の住む札幌から、熊本までは大変な距離であるが、決意した。そのときに、九州まで行くなら、帰路に福岡、山口と経由して帰ってくれば、皿田兄の奥様や、ご母堂に再会できるのではないか、と、直感が働いた。ご住所も電話番号も解からない中で、一〇四で、周南市（旧徳山市）で、皿田さんといふお名前の家を探してもらった。一軒だけみつかった。すぐにお電話し、皿田兄のご母堂とお話しできて、出会ひが叶った。そして、奥様　皿田美穂子さんの消息も教へていただき、奥様にも連絡ができた。

合宿後、奥様、ご母堂との再会がかなった。福岡駅で奥様と待ち合はせ、夕食をともにさせていただいた。十四年振りの再会である。そのとき、奥様は、皿田兄を語るのに、写真があった方がよいと、たくさんのお二人でのご旅行のお写真を持参されてきた。話は、たいそう盛り上がった。そのお写真をお借りすることができ、帰宅後、電子化させてもらひ、電子版とともに返却させていただいた。

何とか、写真集か、遺稿集ができないか。長年の無念な思ひは、前進へと変はった。無事、十三回忌もおすませになったといふ。なんとか、遺稿集を作ろう、と、奥冨さんに相談し、趣旨説明書を作成し、皿田兄と親交のあった方々に追悼文をお願ひする段取りをすることが大事だ、とご助言いただき、本遺稿集の編集作業がはじまった。

本当に長年の失礼を皿田兄、奥様、ご家族にお詫びしたい。前進あるのみ、さう自分にいひかせて、皆さんにお声かけしたところ、貴重な玉文をいただくことができた。遺文、遺詠は、岸本さんのお力もお借りし、私の保管するものとから原稿を起こすことにした。ワープロは、歴生会のＯＢで分担した。みなさん、心から賛同してくれた。また、小柳志乃夫兄にも、遺文・遺詠の発掘とワープロ化を手伝っていただいた。か

うして出来上がったのが本編である。また、奥様、お母様から、貴重なお写真をお借りでき、本稿の冒頭に掲載させていただき、大きな思ひ出とし、皆様の心に残るものとなった。

本当に長い年月の経過をお許しいただきたい。そして、謹んでこの遺稿集をご霊前に捧げたい。

二　皿田　宏君の略歴

昭和二十九年十月十七日	徳山市内病院にて誕生。
昭和三十六年三月	徳山市今宿幼稚園卒園。
昭和四十二年三月	徳山市今宿小学校卒業。
昭和四十五年三月	徳山市住吉中学校卒業。
昭和四十八年三月	県立徳山高校卒業。
昭和四十九年三月	東京都小岩市で下宿、一年浪人の後、東京工業大学六類（建築、土木、社工）、東京理科大学理工、早稲田大学理工、慶応大学理工、慶応大学法学部の各大学に合格。
昭和四十九年十月	東京正大寮入寮。松藤力氏、石井孝一氏と寮生活。昭和五十一年三月退寮。
昭和五十四年三月	東京工業大学工学部土木工学科卒業。水球部、歴生会に所属。
昭和五十四年四月	防衛施設庁奉職。
昭和五十五年四月	防衛施設庁硫黄島施設に赴任、二ヵ月勤務の後、東京勤務。
昭和五十六年四月	防衛施設庁福岡支局　赴任
昭和五十八年十一月二十一日	旧姓　坂本美穂子様とご結婚。
昭和五十九年四月	防衛施設庁沖縄支局赴任。昭和六十二年東京本部赴任。
平成五年四月	防衛施設庁熊本支局赴任。五十嵐善紀支局長、矢野寛次長の下に支局課長を担当。
平成七年六月	白血病発病。
平成八年四月二十八日	逝去。享年四十一歳。戒名　寶珠院浄譽春光積善居士。 平成十四年九月十七日ご尊父逝去　享年八十歳。

三　戒名

寶珠院浄譽春光積善居士

平成八年四月二十八日逝去

俗名　皿田　宏　事

享年四十一歳

四　ご遺族からのお言葉

1．皿田美穂子様　喪主挨拶文(平成八年四月三十日)

本日は、ご多用中のところ、遠路より亡き皿田宏の為に多数ご会葬下さいまして　本当にありがとうございました。

又、丁重な弔辞をも頂き　厚くお礼申し上げます。

主人は、晴れやかな場を苦手としておりましたので、この様に大勢の方々に見送られ、沢山の花に囲まれ、ちょっとテレながら　いよいよ旅立ちを待っていると思います。

今、主人は、全ての仕事を為し遂げ、役所に出かける時の様に、Yシャツにネクタイを締め、背広を着、ズボンにベルトをし靴下・靴を履き、最後のヒゲを剃り、メガネをかけ満足気に、二度と戻って来ることのない出来ない旅へと出発しようとしております。

いつもの年なら、今のこの時期、我が家のささやかなる楽しみだった海外へ二人して出発していたことでしょう。今年は主人が只一人、誰にも止めることの出来ない運命という計画の下、一人旅立とうとしております。でもその旅の目的地には主人を可愛がってくれた祖母や叔父、幾人かの先輩方、そして施設庁に残った同期の三人の一人　渋谷純さんが、先発隊としてすでに到着いたしております。ですから、主人にとってその地は決して淋しい所ではないと私は信じております。

到着後は、主人のことですから、ビールを片手に凄まじかった闘病生活を自慢気に語っていることでしょう。

私の方も、純さんの奥さんと施設庁未亡人会をつくろうということになりました。その様なことですから、私もいつまでもメソメソなどしておれません。

これからは、後に残った者皆で、力を合せ頑張っていきたいと思っております。

しかしながら、今迄、主人に全て頼りっぱなしだった私です。これから、何かと皆様のお力をお借りしなければならない事が多々あると思います。どうぞ、これからもお力を御借りしくださいます様、よろしくお願い申し上げます。

本日は、本当にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

平成八年四月月三十日　　皿田美穂子

2・皿田美穂子様より大町へのお便り（平成八年六月十六日）

前略

先日は、お電話ありがとうございました。

最近、将来のことを考え不安になったり、主人の遺品や写真を見ては、生前の主人を思い出し涙する日が多くなってしまいました。

そんな折、お電話をいただき大変嬉しく思いました。

今にして思えば、主人には、只の雑音にしか聞こえなかったかもしれませんが、私の独断で、いつもその時々の音楽を聞き、私達なりの思い出を作って来たつもりでおります。

今は、そんな思い出の曲を耳にしながら、主人の遺品や写真を整理する都度、まだまだ涙がこぼれてしまう毎日です。

こんなことではいけないと思いながらも、心の立ち直りには、かなり時間が必要のようです。その様な時でしたから、大町さんからのお電話には、随分と励まされました。

又、今回の主人のことでは、国民文化研究会の皆様には大変お世話になり、暖かいお心遣いも頂き、本当にありがたく思っております。

七月末には、熊本を離れ、実家（福岡の久留米市）近くへ引っ越すつもりでおります。落ち着きましたら、お知らせ致します。今後とも、どうぞ主人同様よろしくお願い申し上げます。末筆ながら、どうぞ奥様によろしくお伝えください。梅雨の季節です　どうぞお身体大切にお過ごしくださいませ。

かしこ

平成八年六月十六日（１９９６・６・１６）　皿田美穂子

〒０６４　札幌市中央区南五条西二六丁目　エクシード円山南　一〇三

大町　憲朗　宛

〒８６２　熊本市栄町二―一八　一―二六

皿田美穂子　様より

3．ご母堂をご訪問して（お聞きできた皿田兄の思ひ出）

大町憲朗

平成二十二年八月二十四日　私は、周南（旧徳山市）市のお母様を訪問することができた。そして、無量寺の墓石にお墓参りがかなった。ご訪問のおり、ご自宅、道々にお聞きできた、皿田兄の思ひ出話しをここに掲載させていただきたい。（以下、お母様の口調で記述）

幼い頃は、負けん気の強い子でした。小学校の頃、柔道教室に行っており、ある大会で絶対負けたくない大柄な少年と戦い、ここぞというときに、体をねじって背負い投げをしたら、自分の体をよじり、脊椎をいためてしまった。負けん気が強かったからでしょう。そして、今思えば、病院に入院させればよかったと思うものの、自宅で、私が治療してやりました。（ご母堂は、看護婦の免許を保持）　それで、完全に完治したものか、今だに悔やまれています。白血病は、脊髄の病気ですから、そのときに、病院で治療させればよかったものかと、未だにくやまれます。

中学時代は、本当によく勉強しました。中学で、一、二番では、なかったでしょうか。よく夜遅くまで、部屋に電気がついていました。それから高校にいって、勉強をそのまま続けてゆけばよいものを、学生生活は謳歌するものだ、と、いいだし、あまり勉強せんかったです。それでも、そこそこの成績はとっていました。何か、学生生活に魅力を感じたんでしょう。私は、あまりうるさく言わなかったです。

そして、東京の小岩市に下宿して、浪人生活を送りましたが、本当によく勉強したようです。結果として、一浪してから、東京工業大学、東京理科大学理工、早稲田大学理工、慶応大学理工、慶応大学法学部と、受験したところは全て受かってしもうたです。自分で言ってたように高校時代は謳歌し、その後から猛勉強し、目標を達成したのでしょう。

美穂子（奥様　皿田美穂子さん）さんとは、今もずっと、なかよう連絡しあっています。

宏の妹は、夫婦で薬剤師で、近くで、薬局をしております。その息子が今年京都大学に現役で合格し、私の励みの一つにしております。

宏の父親は、宏がなくなったことをずっと悔やみ、そのまま元気がなくなり、平成十四年に他界しました。宏がいないのがたいそう、寂しかったようです。

今、私も八十四歳ですが、幸い元気で、今の家に一人で住んでおります。近くに宏の妹夫婦が住んでいるので、毎日のように、遊びに来てくれて、寂しさをまぎらせてくれています。

宏の部屋は、空き部屋になっていますが、机ひとつおいて、そのままにしてあります。（机の上には、お花を描いた油絵がおいてありました。それは、お母様が描いたものだとのことでした。）

無量寺の多くのお地蔵さんがかぶっている毛糸の赤い帽子は、私が編んでかぶせてあげたものなんです。かわいいでしょ。

では、これはお土産です。（ふぐのみりん干し）なかに、戒名の札をビニールにいれて、付けてあります。向こう（浄土）では、これが名前じゃけんね。この名前で生きているからね。（私は、そのお札を大事にいただき、今も身から離さないようにカバンに入れて通勤しています。）

それでは、遠くからわざわざきてもろうてありがとうございます。宏も喜んでおると思います。では、さようなら。

五　遺文・遺詠と先輩からの感想

1．　昭和四十九年大合宿（霧島合宿）

もくもくと地面をみつめ登りゆきついに眼前（めまえ）にめざす頂（いただき）

東京工業大学　工学部　一年　皿田　宏

2．昭和五十年問題提起文（久留米合宿）

東京工業大学　工学部　一年　皿田　宏

小林秀雄先生の御本を読んで思ったことを列挙します。「拙く書くとは、すなわち拙く考えることである。拙くかけてはじめて拙く考えていたことがはっきりすると言っただけでは足らぬ書かなければわからぬから書くのである。」（文学と自分）　歴生会では、前期にこの本の輪読を行ったのです。その復習の意味で歴生会の秋の合宿で僕は「文学と自分」についての発表を行いました。

このときには、この本を四回ほど読みました。そして、二回ほど読み終えたところで、なんとか原稿が出来ました。でも、なかなかうまくことばが出なくて思っていることを用言するのに苦労しました。三回目、四回目と読んでゆくうちにだんだん思っていることがすらすら書けるようになりました。考えを煮つめれば煮つめるほどだんだん文章がうまくかけてゆくことに気づいたのです。「拙く書くとは、即ち拙く考えることである。」このことばの意味が実感として掴めました。

「おのれの世界は狭いものだ貧しく弱く不完全なものであるが、その不完全なものからひと筋に工夫をこらすというのがものを本当に考える道である。」（文学と自分）

小林秀雄先生の本を読んでいると大変難解ですが、なんども読んでゆくうちに少しづつ文章の意味内容がわかってきます。ところが本の中に書かれてある記憶で過去の自分の経験の内に思い当たることがある、そんなときにはその書かれてあることばが腹にこたえて解るという感じがするのです。そういうのが「ものを本当に考える道」の意味だと思います。

「誰が自分の性格などを詮議することによって自分の正体を掴んだでしょうか、そういうことについては、ぼくらの実生活はぼくらにけっして間違ったことを教えてはいないようです。」（歴史と文学）ここで、思うのは、こんなことです。例えば、自分があることで悩んでいて、それ

を人にいったところ、その人は、「君の悩みはこうこうこういうことなのだ。」と簡単にいわれてしまうことがあるのです。おととし、僕が下宿していたところで隣の部屋の男が女性問題で非常に苦しんでいました。彼とは、そのころよく酒を飲みました。その下宿は、江戸川の土手のたもとにあったのですが、「江戸川で泳いでくる。」といって裸で部屋をとびだし、本当にそのようにして、ぼくらをはらはらさせたものです。その彼がある晩、土手に腰かけてぼくらと話したことがあるのです。ぼくらは、彼の話を聞いては、勝手なことをいっていました。そしたら、彼は、とうとう「誰も俺のことなんかわかっちゃいない。」といって部屋にとじこもってしまいました。僕らは別に悪気があったわけではないのですが、彼は大変おこりました。

この本を読んでいて気がついたのですが、このことを思い返してみて、やはり僕らは、彼のことをわかっていなかったと思うのです。つまり、ぼくらは、彼の悩みの深さがどれくらいかを理解しようとしていなかったのです。事のなりゆきを聞いて自分の考えをああだ、こうだといって彼の心境をわかったようなつもりになっていたのはまちがっていたと思います。人に関する事件の真相はその人の苦しみとか喜びとか計れないものをぬいては、ほんとうではないと思いました。本当のことを知るには愛情が必要なのだと思いました。この流儀で歴史に対せよと小林秀雄先生は教えているように思う。

3．昭和五十年（久留米合宿）

短歌創作春季合宿（福岡・久留米）記録より

食堂ゆ帰りてくれば友どちは和歌創作にとりくみをらる
まうすでに十首以上の数多き歌を詠まれし先輩（とも）もをられり
他の友は一個もできぬとけんめいに紙をみつめて考へてをり
詠み終へて風呂に出かける友をみて一首わけろと冗談いはれり
寝ころがり目をとじじっとしときおりにペンを走らす友もあるなり
部屋内の友らは無言で詠まれをれば静まりかへりてはりつめてをり

東京工業大学　工学部　一年　皿田　宏

4．昭和五十年（学生研究会）

「第二回学生研究会」報告（十一月一日）より

東京工業大学　工学部　二年　皿田　宏

国文研事務所に発送作業の手伝ひに行きて
なにげなく受けとる封書にこれほどの手間がかかることはじめて知りぬ

5．昭和五十年　書簡　東工大歴生会大原合宿報告への便り（六月二十二日、二十三日）（奥冨から大町宛の抜粋）　先輩の感想

大町憲朗兄

前略　先日大町君より六月二十二、二十三の両日にわたって房総の大原へ一泊旅行した時の事を歌った歴生会の友の歌を見せて戴いた。一首一首を詠んでゆくうちに次第に楽しい思ひにさせられた。参加しなかった私にも大原の海辺の様子などが彷彿としてくるやうだ。大原へ旅したら是非とも歌を創って欲しい、といふのは私の強い希望であった。なぜかといふと一緒に参加できなかった私にも大原での一泊二日の友の姿を偲びたい気持ちがあったからであるが、それより更には折角の機会であるし歴生会につらなる若き友らの青春の系譜の一コマとして“現在の有りの儘の姿”を歌にとどめて欲しかったからである。

現代の世相の中には冷たい荒廃はあっても人の心と心を通ひ合はせるものは少ない。伝統文芸として日本人が育くんで来た和歌の本質にはこの“お互いの心と心に暖かい情感を通はせ合ふ”ものがあると私は実感してゐる。

ここに大原に旅したあとの諸友の歌について感想まじりの手紙を書くことにした。五人の方にそれぞれ書いても良いが“共に学ぶ”ことに視点を定めたいので同一文章を五人の方に送る。自分の箇所だけでなく友の分にも目を通してあげてください。

（皿田君の歌に対する奥冨の所感）

皿田　宏　君宛

一人遅く着き先輩の迎へに来てくれたとき先輩の迎へにうれしかりけり

大原の駅のベンチで待ちをれば自転車に乗りて迎へに来たり

民宿は海のそばだと先輩いわばかすかににほう潮のかほり

横になり電気消してもそばがらのまくらが固くしばし寝つけず

初めての合宿に我寝つかれずとなりの先輩のいびきもうれし

皿田宏君が初めて歴生会で歌を創りましたといかにも嬉しさうに知らせてくれたのは布瀬君だった。そして見せてもらったのが同郷の友と初めてマージャンをした時の歌であった。郷里を遠く離れてゐると同郷人には中々逢へないだらうからその感激もひとしほであったやうだ。ただマージャンのことと一緒に歌はれてゐたので別々に歌ふべきだと感じたことを記憶してゐる。そしてここに取り上げたのが皿田君の第二回目作品である。第一首目、二首目の歌のベンチに待ってゐる時の歌はもっともっと深めてみればすばらしいものになった筈と思ふ。先輩が迎へに来てくれたその時の姿を見い出した喜びやうれしさを自分の心に率直に認めてありの儘に、そのままに表現されれば、それが歌の真髄につながると思ふ。そしてそのありの儘の心が皿田君の歌を詠む人をして感激あらしめるのであると思ふ。模範的な例になるならないは別として私なりに次のやうにしてみた。

友どちに遅れてひとり夜おそく着きにし駅は心細しも

先輩のいそぎ自転車走らせて吾を迎へに来てくださりぬ

心細さも一度にはれて先輩の姿をみればただに嬉しも

続いて三首目、四首目は次のやうにした。

かすかにもかをり来るかな潮の香は海辺近しと先輩（とも）語らるる

なかなかに寝つきがたくて先輩の寝息にしばし耳かたむける

最後の一首の最後の一句の意味が不明確で“いびき”も“うれし”とは何のことかわからない。恐らく枕を一緒に並べて寝る高校時代の修学旅行の様な楽しさを味はったのではないかと思ふがまう少し正確に表現されたい。次のやうにしてみた。

共に学ぶ友らと過ごす初めての夜と思へばうれしくなりぬ

学生時代に得た友（先輩、後輩を含む）は終生かけがへのないものとならう。歴生会に学ぶ機縁を得たことはそのまま友を見出す道にもつながる。大原でのこの一晩の新鮮な思ひを忘れないで大切にして欲しい。

6．昭和五十年　第三回学生研究会報告　十二月六日　於　正大寮

東京工業大学　工学部　二年　皿田　宏

高校同窓生の西岡君ゆ恋をしぬとのたよりありけり

御岳にて出会いし女性を一生の伴侶と決めぬと友はいふなり

失敗を恐れず進むつもりてふ友のことばに驚かされぬ

はっきりしたことばの端にかつてなく生き生きとせし友のしのばる

真剣に生きをる友に恥ずづることなきやう我も生活したし

なるべく文語体で書くべきだ。といふ指摘があり、たとへば、一首目の「恋をした」は、「恋をしぬ」といふやうに直していった。

7．昭和五十年　東工大歴生会水戸大洗秋合宿記録集「学びの道第六集」より（十二月十三日、十四日）

7―1　巻頭言（昭和五十年）

東京工業大学　工学部　二年　皿田　宏

十二月十三、十四日、歴生会秋合宿を去年と同じ場所　水戸大貫海岸の「東工大臨海宿舎」で行いました。参加者は、小田村、皿田、古宮、大町、島崎の五学生と大阪からわざわざかけつけて下さいました　布瀬さんと奥冨さんの七名で行いました。（大岡さん、内田さんは、御仕事の御都合で参加されませんでした。）

今回の合宿は一泊二日と短いながら充実した密度の濃いものであったと思います。学生の発表では特に小田村君が自分の歴生会に関する思いを素直に述べてくれたもので印象深かったと思います。

又、奥冨さん、布瀬さんは、明治天皇、大正天皇の御製研究を発表されました。奥冨さんの発表を聞いて「日本に生まれてよかった」としみじみ思いました。夜のコンパでは、奥冨さん、布瀬さんをかこんで楽しいひとときを過ごしました。

このつながりを大切にし、来年もさらに、研鑽し続けてゆきたいと思います。

7―2　昭和五十年　歴生会合宿における研究発表「短歌について」

「短歌について」

東京工業大学　工学部土木学科　二年　皿田　宏

僕ら歴生会では、歌を詠みそれを勉強の柱としてをります。僕は去年の九月頃から創ってをります。初めて「歌を詠め」と言はれた時には「変ったことをするものだ」と驚いたものです。それ以来約一年やってきたからもう随分多くの歌を創ったと思ひます。何故自分は短歌を創るのかといふことを自分なりにはっきりさせたく思ひました。それは例へば「学生研究会」の短歌相互批評で

　たたなづく青垣山に霧立ちて雨の大和はあはれにやさし

かふいふ歌が出てきます。『たたなづく』とか『青垣山』だとかはよくない」と思ふのであるが、どうしてよくないのかうまく言ひ表はせな

い。勧誘の時、「僕ら歴生会では歌を詠む」とか、どうもはきはきいへない。何だか照れくさくてはづかしいのです。

何故自分は歌を創ってゐるのか考へました。考へてみると大した理由は思ひつきません。自分が創った歌を皆に見せてそれを皆がわかってくれた時のうれしさが挙げられると思ひます。去年のこの合宿で僕は奥冨さんの御長女誕生を詠ひました。

合宿は水戸大貫の宿舎にて先輩（とも）も交えて行はるとふ
我らみな大君の御製学びをれば奥冨兄ゆ電話あるなり
我が兄にはじめての御子生まれしと電話にいでし友いひにけり
おのが子の生まれしときに御一報下さる兄の御心うれしも
我が兄は親となりにしお感動（おも）ひを歌にたくして我らに賜ふ
我が兄の御歌うたひてはじめてに親となりたるお思ひ偲ばむ
友の詠む兄の御歌を聞きをればお思ひ切に偲ばるるなり
なにとなくはづかしき思ひ迫り来とふ兄の御心思ひ偲ばる

合宿の相互批評で皆が「感じがよくわかる」といってくれて、自分の気持ちが通じたことを随分嬉しく思ひました。

去年、歴生会で輪読した「短歌のすすめ」の中の「短歌のつくり方」の節に「歌をつくる目的」といふ項がありました。それを読み返してみました。その項はさらに三つに分かれ、第一に「歌をつくるということは日常一般の行為とは違うのです。行為そのものではなく、行為の意味をわれわれが感じとる、ということなのです。従って、歌を詠むのはわれわれが生きがいを求めることであり、又その生きがいのひとつの把握の仕方だといってもいいかと思います。」歌を創るときは、心の動いた経験を思ひ出し、その経験の中で一番核心をことばに表はします。歌を創ると自分の経験をまう一度よく思ひ返してみることになります。「生きがいの一つの把握の仕方である」といふのはよくわかりません。

第二は「短歌と国民同胞感―その倫理性」といふ見出しがついてゐます。「短歌における平等の原則」といふ言葉が説明されてゐます。防人の歌には平安時代の貴族の歌よりすばらしいと思へるものがたくさんあります。歌をみるときには地位や身分での差別は何もしません。太子の本の中に出て来る「内的平等」といふ言葉を思ひ出します。

三番目は「永久生命への没入―その宗教性」。僕の詠む歌がまさか千年後の人に詠んでもらへるとは思へず、このこともよくわかりません。

「短歌のすすめ」の中の言葉は多くピンときません。歌について思ひの他わからないことが多いのに気づきました。「歌を何故創るか」といふことは創っていくうちに段々とわかってくるのではないかと思ひます。「永久生命への没入」「短歌と国民同胞感」などの言葉はよくわかりませ

んが、頭の中で暖めておかうと思ひます。

7―3　昭和五十年　書簡の一部（前掲の皿田論文「短歌について」の感想 - 奥冨から皿田兄へ）

「短歌のすすめ」を中心にしての短歌についての発表でありました。貴君自身も言はれてゐたやうに十分な準備ができない儘での合宿であったやうですがこの文集の文章にはまう少し深められたものを期待してゐたのですが、まだそこまでには至らずただ「短歌のすすめ」の感想を書いたといふところにとどまってしまったやうに思ひます。たとへ、合宿での発表が十分なものでなくとも合宿後に文章としてまとめるのであればその不十分な箇所を補ふぐらいの努力は欲しいと思います。徹底してこの本に自分の身心をぶつけて読んだといふ態度は残念乍ら感じられない。これこそが和歌の、短歌の真髄なのだ、といふところをグイと握りしめるやうな勉強であって欲しいと思ふ。夜久先生、山田先生がかたむけられた情熱の一端なりとも汲み取ることがなければ「短歌のすすめ」を読んだことにはならないのではないか。これから春の大阪合宿に対する問題提起書の準備をするのでせうが、この点をまう一度ふりかへってみて新鮮な気持ちで取り組まれることを希望します。小生、「短歌のすすめ」については手あかでよごれるぐらゐまで読みました。現在持ってゐるのは三冊目となりました。

7―4　昭和五十年　東工大歴生会秋合宿（水戸大洗合宿）和歌相互批評

東京工業大学　工学部　二年　皿田　宏

七時に起き大洗海岸に出てゆけば朝（あした）の海の美しかりし

この歌は、海岸の土手の上から見た早朝の海の美しさに感動して詠んだものであるが、『七時』という時刻を詠う必要はないという指摘があった。また、『大洗海岸』という地名は但書きに入れれば歌に詠むよりもよいということであった。むしろどのように美しかったのかを歌にいれた方が読む人にその感動が伝わると思う。

朝の日に照りわたりたる空をみながら声高らかに誦ひまつれり

『空をみながら』は字あまりがあるため、また、口語であるため通して読む時、すんなりといかないという事があげられた。この部分は、『空みあげ』とした方がよいという指摘があった。

7―5　昭和五十年　東工大歴生会秋合宿（水戸大洗）合宿感想文

東京工業大学　工学部　二年　皿田　宏

一番最初に発表したのですが、準備不足の為よくわからないものですいませんでした。大町さんの発表の中で、『教える親教えられる子という関係なら親子のみとは限らない。親子ではなくともそういう関係はありうるのだ。』という言葉が印象に残っている。

古宮さん、島崎さんの発表は資料を綿密に検討した心のこもったものであったと思う。

奥冨さんの発表を聞いていて『さ夜ふかくゆめをさましてさらにまた軍（いくさ）のうへを思ひつづけぬ』といふ歌につき話されている時、「天皇のいる日本に生まれてよかった。」と思った。

それから翌朝の御製拝誦で担当したが海と空がとてもきれいで『あさみどりすみわたりたる大空の広きをおのが心ともがな』の歌をよんだ時に、とても気持ちがよかった。

8．昭和五十一年　東京地区問題提起文　日本史教科書を読んで

東京工業大学　工学部　二年　皿田　宏

日本史教科書を読んで

「国民同胞」の山田先生の文章を読んだのがきっかけで、高校の時使った日本史の教科書のはじめの方を読んだ。神武天皇の事と西暦の紀元前六六〇年が皇紀元年なので、そのところを調べて参考にしようと思ったのだ。年表を見ると、天皇の欄はずっと空白で西暦五七年に最初に（応神・仁徳）とカッコ付で出てくる。紀元前六六〇年ごろは、「紀元前数千年の頃新石器文化。縄文文化式土器使用」「紀元前一～二世紀ごろ水田

耕作始まる。青銅器の使用」というのがあるだけであり、あまり参考にはならなかった。一方、倭の国とか邪馬台国が出てくるので、これらは、神武天皇がつくった国とどうなっているのかと思った。日本のはじまりはどうなのかを探しながら本文を読んだ。

まず、後漢書東夷伝を資料に挙げている。「建武中元（西暦五七）～倭国大いに乱れ更（こもごも）相攻伐して暦年主（あるじ）なし」本文では、これを根拠に「一世紀から二世紀にかけては、まだ、小国分立の状態が続いていたことがわかる。」とある。倭の国とは、昔中国人が日本人のことを倭の人と呼んでいたので倭の人の国というわけであります。邪馬台国については、九州説大和説の二つの学説を挙げています。九州説―邪馬台国は北九州を領域とする小規模のものであった。大和説―邪馬台国は、即ち大和朝廷であって、このころすでに北九州をも支配するかなり広範囲の国家が出来ていたことになる。結局、「おそくとも四世紀半ばごろまでには、現在の皇室の祖先を首長とする大和朝廷が大和を中心に九州をも支配する大きな統一国家を作りあげた。」のであります。どうも何となく発生したもののようであります。僕は、神武天皇はつくり話だと思った。教科書に書いてあることは、全部事実であり、まちがいないのである。

でも、これでは愛着の感じはわかない。教科書にあるような事実を知れば、日本の歴史を知ったことになるのか。一昨年の合宿で小林秀雄先生は、「国生みといふ事が信じられてゐたといふその事が歴史です。」とおっしゃった。この「国生みといふ事が信じられていたといふその事」は、どうなってしまうのだろう。このことは、客観的な事実とはいえないのだろうか。そういう事じゃ、教科書にのせてはいけないのだろうか。

9．昭和五十一年（春季持経寺合宿）春季合宿（大阪・持経寺）記録より

東京工業大学　工学部二年　皿田　宏

頂にて友と語りて
合宿が終った後に家に是非来て下さいと語りてくれたり
水球の合宿ありて行けねども手紙を書くと我は言ひけり

（感想文）

今は非常に疲れている。頑張った証拠だと思って満足している。去年は勧誘をしなかったが、今年は勧誘をするつもりだ。合宿中、一番長い時間話したのは小川君で、出来れば文通しようと思う。

10．昭和五十一年「正大寮短歌通信」（五月十四日）より

東京工業大学　工学部三年　皿田　宏

歌の会に歌をよもうと思ったがよみたいことがなくてこまった

（感想文）

歌はなかなか出来なかった。これだけの会を開くのにも、掃除、連絡、ガリ切り、印刷、遅れた歌をもぞう紙に書いたりする仕事があります。僕は、全然手伝わなかった。今日は、参加したくなかった。

11．昭和五十一年「正大寮短歌通信第三号」（十月十五日、於新宿共益ビル二階電発社友会）より

東京工業大学　工学部三年　皿田　宏

正大寮一年生の阿川君と語りしをり

寮生は忙しからうととふ我にきたへられますと友のこたへり

活発に寮生活を語るともにまけてはならじと思ひけるなり

12・　昭和五十一年十二月十八～十九日　歴生会秋合宿「学びの道」第七集より

於　渋谷青少年研修会館

12―1　昭和五十一年　家永三郎著「検定不合格日本史を読んで」

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

下宿の側の本屋に教科書裁判で有名な家永三郎さんの不合格教科書の原本があった。好奇心にかられて買って読んだのだが読んでいくうちに次第に腹が立って来た。中でもひどいと思ったのは「明治憲法が政治の上で日本の方向を決定したのと同様に、教育勅語は国民の精神を一つのわくにはめこむために有力なはたらきを演じた。小学校教育は一九〇四年（明治三七年）以来、国定教科書による統制が行われた。修身では、近代的な社会道徳を教える代わりに、天皇に対する「忠」親に対する「孝」というような上位の者に対する服従の道徳を中心とする消極的倫理を教えるように定められ、また歴史では「古事記」「日本書紀」の神代説話をそのまま実際にあったできごととして教えるように要求されたのである。」　こういうのが教科書として使われたら、と思うとぞっとする。教育勅語が国民の精神を一つのわくにはめこむとか、「忠」「孝」が服従の道徳であるとか、これほどまでとは思ってもみなかった。

ところで僕が初めて参加した夏の合宿で家永さんの教科書の話が出た時、班長の人が「とんでもない教科書だ」と言われたのだが、僕はその言葉を意外に感じたものである。それで当時のニュースや新聞をみてみようと思い、図書館で当時の新聞を探し出した。

教科書裁判といっても二つあって家永さんが国に賠償金を請求した一次訴訟、検定処分の取り消しを求めた二次訴訟がある。まず昭和四十五年七月に二次訴訟の判決があって家永さんは勝訴する。その日の夕刊の見出しは

朝日新聞「検定、内容介入は違憲―思想審査になる」「教育権国民に帰属」「検定制度は認める」

毎日新聞「教科書検定運用に違憲認む―記述内容への介入は表現の自由侵す」

これはよい判決が下ったと思った。他の記事からも同様の感じを受ける。社説に共通して「国家権力が教育内容に立ち入るのは好ましくない。」という考え方があるようだ。しかし、家永さんのは何としても教科書としてふさわしくないと思う。学問の自由はよいのだろうが、生徒が使う教科書に家永さんのみたいなのがあらわれるのはやめてもらいたいと思う。

とにかく教科書裁判なら、その問題の教科書や判決文を読んで社説や記事を読むというようにしないと、とんでもないまちがいをしてしまうという事がわかった。

12―2　昭和五十一年「奥冨先輩発表要旨」

松陰の学問態度―人生と学問と―

文責　東京工業大学工学部　三年　皿田　宏

奥冨先輩の発表は「みんなに聞いてほしい。」との事で大岡先輩の到着の後はじめられた。最初に小題「学問の出発点における『立志』」として玖村敏雄著「吉田松陰の思想と教育」（文末に掲載）の一部を引用されその解説の中で、「松陰は常に学問における『立志』と言う事を考えていたのだがこれは学問と人生とを切り離せないものと考えていたからではないか。そして我々は学問とは人生において何であるのか、この問題を一度原点に立ち返って考えてみる必要があるのではないか。」と述べられた。

そこで、儒学、朱子学が主流をなした時代にあって自主的な学問態度を貫いていった松陰が「排斥すべき」としている学問態度を四つ示された。それらは、㈠詩文に淫する態度㈡名利の為の学問㈢顧問の学㈣卑屈の学、であるが特に前二者について詳しく述べてゆかれた。まず「詩文に淫する態度」について「寡欲録」を引用され語句の説明の後「松陰は詩文といったものが学問の中心であった時代の中で、そのような趣味生活に没頭し、さらに自分が他に優越していると思い込む態度を批判している。さてこれは現代ではどうか、むしろそういった趣味すら持たぬ人がほとんどではなかろうか、それが問題だ」。と述べられた。

第二に「名利の為の学問」について孔孟余話梁恵王上首章「籐天公下」第九章を引用され「この文を読むに当たり注意すべき事は『名利』そのものを否定するという事ではなく、人生の目的を『名利』を求める事におく、又その為に学問をするという態度を批判しているという点である。もし学問というものが自己の人格を高め人生を深め豊かにするものであってみれば名利や利益を求める為に学問をするという事は間違った態度といえるのではないか。」と述べられた。

次に先輩は現代では「学問」という言葉がどういう意味で使われているか、大別して　―　一、大学の専門課程を意味する。二、例えば「学問のある人」といえば、博学な人を意味するといった使われ方　―　の二つぐらいしかないのではないかと指摘され「学問」という言葉が自覚された言葉として出てこない、僕らが考えてゆきたい「学問」とはこれでは足りないのではないか、松陰の時代は日常生活の中に学問というも

のがあったのだと思う、学問というものを日常生活の中、即ち人生の中に密着したものとして呼びさましてゆかねばならぬという気がする。

そして先輩は卑近な例として四つの生き方を挙げられ、我々にどう思うかと問題提起をされた。

㈠大学の専門課程をマスターする事が主目的の学問態度

㈡友とのつきあいもほどほどにしてあまり深く立ち入らない方がよいという態度

㈢自分の私生活が経済的社交的に守れれば良いという態度

㈣現代の目先の事柄のみを追いかける生き方

以上の態度に付き「いづれも何か大切なものが抜けている或は中途半端なものがあるのではないか。結論を求めるというのではないが、自分はどう思うか考えてほしいと述べられた。僕にとって思い当たる所もあり、非常にきびしい指摘であった。

そして最後に「昔の人は『立志』という事を問題として、日常の生活の中で考えていた。それはとりもなおさず学問と人生とを密着したものとして考えていたからではないかと思う。学問というものを人生の中でどう位置づけるのか、この問題を呼びさましてゆきたいと思って今日の話をした。」と結ばれ、講義を終えられた。

12―3　昭和五十一年　短歌創作

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

輪転機のみつからず文集の印刷できざる時、松藤さんに輪転機を紹介していただきて

文集の印刷できずこまりしをり松藤さんのお力かりぬ

忙しき中時間をさきてお手伝ひくださる先輩（とも）のありがたきかな

12—4　昭和五十一年　感想文

東京工業大学　工学部　三年　皿田宏

今回の合宿では宿との交渉を担当したりと、幹事の役割をした。失敗してみんあに迷惑をかけてしまった。取り返しのつかない事をして云々してもしようがない。今回の合宿の経験を教訓として生かそう。奥冨さんは先日の富浦での合宿での小柳君の質問について三週間もたたないうちに勉強して発表された。しかも、その内容は僕にとって非常にきびしいものであった。忘年会で大町さんが、「皿田しっかりしろよ」といったが、心にこたえる言葉であった。

13・昭和五十一年十二月「正大寮通信」より

東京工業大学　工学部　三年　皿田宏

歴生会にて

角田（つのだ）君は書（ふみ）をよまぬとだしぬけに言ひだしたれば我おどろきぬ

場所をかへ先輩方と懇談する

先輩と語らふうちに時折は友も敬語を使ひはじめぬ

14・昭和五十二年（春季宮地嶽合宿）春季合宿（福岡・宮地嶽）記録より

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

開会式のをり

目の前の日の丸の旗みつめをればおのが心のたかなりにけり

会場につきて

式場に入りて正面の日の丸を見れば心のたかなりにけり

15．昭和五十二年　東工大歴生会新人勧誘ビラ（巻頭言）

新入生特集号　「理工学だけがすべてではない」

連絡先

〒105　渋谷区千駄ヶ谷三―三八―一一　TEL　405　―　9345

金田荘　皿田　宏

日時　毎週木曜日　十八時～二十時

場所　緑ヶ丘　社公棟三階　第二ゼミ室

今年の予定　新入生歓迎コンパ　合宿　遠足　秋合宿　卒業生追い出しコンパ

巻頭言（皿田　宏　文責）

東京工業大学　工学部土木工学科三年　皿田　宏

君！　ご入学おめでとう。

僕の入っている―歴史の中に生き方を探る会―では、君の入会を心から御待ちしています。

まず、歴生会の歴史を簡単に説明しましょう。昭和四十五年、僕らの先輩が社団法人国民文化研究会主催『学生・青年・合宿教室』（昭和三十年から毎年、学生・青年　約三百名が集い、九州で行われる研修合宿）に参加し、人生に取り組む姿勢を学び、是非、東京でも勉強を続けてゆこうという訳で、東工大で読書会を開始しました。『歴史の中に生き方を探る会』のはじまりです。

東工大では、自分の専門とする技術や、それについての知識を得る事ができます。只、その技術を社会でどう生かすか、とか日々報道されるさまざまの社会問題を自分はどう受け止めるかといった、自分の生き方にかかわる問題を考える場はなかなかありません。技術や知識をつめこむだけでは、片手落ちではないでしょうか。

一緒に歴史上の人物の書いた文章を読み、そういう人の人生を偲び、そこで思った事を語り合おうではありませんか。

今まで取り上げた本は、「文学と自分―小林秀雄著」「学問のすすめ―福沢諭吉著」「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業―黒上正一郎著」な

どです。（歴生会では、皆で一冊の本を読むことを『輪読』と称しています。）今年四月からは、「ＮＨＫ」の「花神」で出てくる吉田松陰の書いた「講孟余話」に取り組んでゆきます。これは、松陰が下田でアメリカの船に乗ろうとして失敗し、萩の野山獄という牢屋に送られる。そこで、囚人達を相手に孟子の講義をする訳です。囚人達の中で一番年上で七十五歳。その他の囚人も皆松陰より年上です。そんな中で孟子の講義をするのですが、「講孟余話」は、その講義録です。ここに見られる松陰の孟子に取り組む姿勢は、大変気迫のこもったものでありますが、そのような姿勢で僕らは、「講孟余話」に取り組んでゆこうと思っております。

週一回の会の後には、酒を飲んだり雑談したりする楽しいつきあいの場でもあります。どうぞおいでください。以下、歴生会会員の紹介に変えて、各自の一文を掲載します。（歴生会は、東工大生を中心とした会ですが、他の大学からも友人が数名参加しています。）

16．昭和五十二年　雲仙合宿感想文と歌

「胸にこみ上げるものを大切にしたい」

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

夜久先生の御講義の中の遺書を読んだとき、胸にこみ上げるものがありました。このことを大切にしたいと思います。

レジメを持ち帰って、手の届くところに置いておこうと思っています。

ベランダに出でて見あぐればひろごれる夏の夜空の美しきかな

星空を見上げてをれば思はずも明るき星の流れゆく見ゆ

短歌創作　二十一班

雲仙のふもとに生まれし川崎君雲仙見えずもどかしといふ

雲仙のふもとの出身の川崎君は雲仙の景色説明してくるる

17．昭和五十二年　東京地区秋季合宿記録集「ますらを」（十一月五日～七日、神奈川県・三浦海岸）より

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

御製拝誦の練習とて、夜砂浜に出でて
をちこちの浜辺にあそぶ人々の声も気にせず拝誦したり
砂浜に拝誦の声高らかにひびきわたりて心すがしも

（感想文）

一番心に残ったのは小柳君の発表でありました。いかにもいきいきと話してくれたが、黒上先生の言葉や国木田独歩の言葉をいきいきと感じとっていると思えた。同じようなことをいっても話す人の心の状態によって、相手に対する威力は全然違ったものになると思った。故人の心を自分の心によみがえらせるような読み方をしなければならない、と人に話しても、故人の心をよみがえらせるような経験がなければ説得力はないと思う。

18．昭和五十三年編集「講孟余話」輪読感想文

18―1　昭和五十二年九月六日「母雛の専精」を輪読して

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

「外形を以って云ふに非ず、内心を以って・・・」を、母雛の卵を一心に暖める姿を見て、その姿に雛を孵そうという強い気持ちを松陰先生は感じられたのではないか。一事に打ち込んでいても、それに込められた気持ちが確固たるものでないと駄目なのではないか、その内心というものを松陰先生は母雛に教えられ、それで「自ら省察奮励する」と書かれたのではないか、との意見が出た。

私は、はじめ母雛の一心に卵を温めるその余念のなさ、それを松陰先生が「内心を以って言ふなり、内心苟も存せずんば、即ち又一心に思ふ所獨り鴻鵠のみに非ず」と書かれていると思った。前の意見は大町さんの意見だが、聞いていると、松陰先生の気持ちに迫るような解釈だと思った。しかし、少々「それでよいのだろうか」との迷いがある。

それは「内心苟も存せずんば、即ち一心に思ふ處獨り鴻鵠のみに非ず」の意味が通らないことだ。しばらくの間議論したが、結局そこに話が戻ってしまう。大町さんは、「読書作文をするという行為に込められている気持ちが、苟（いやしく）も存しないのであれば、即ち又「一心」＝「他念」＝「込められている気持」ということが存在する。その事は、「非常に稀なことの例えである鴻鵠の話」だけではなくなる。皆がそんなことは、やっているのだから　稀な話ではなくなるのだ」、と解釈されたが、何となく解釈が無理でおかしいような気もする。著者の気持ちを憶念するような解釈なのだが、文脈の上で「それでいいのか？」という気持ちがあって迷いがある。それで時間が来たので打ち切った。

今日は一つ大きな進歩があった。それは輪読会の最後五分間を、その輪読会の感想文を書くという時間にする、という事を決めたことだ。ともすれば忘れてしまう感動を留めておくのはよいことで、私は以前から、終ったら帰って書こうと思いながら、帰ったらやっていなかった。最後に感想文を書くとは、非常によいアイデアだと思う。

今日最後に思ったのは、やはり、松陰先生の勉強の御姿である。

「自ら謂へらく、伏雛に愧づることなし」という御言葉である。本当にそうだったのであろう。勉強しながら何か別の事を考えてしまうという事がよくあるが、正直に言えば、僕にはちょっと真似が出来なさそうだ。しかも毎日松陰先生はそういうお姿で学ばれるのだからすごい。松陰先生は、私など足元にも及ばぬ豪傑である。この姿エネルギーこそ囚人達を驚かし、動かしたのではなかろうか。

18―2　昭和五十二年十月二十五日　「聖人純金の説」を輪読して

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

今日一番残念であったのは、角田（つのだ）が来なかったことだ。あの野郎、来るといっていたのに、くやしい。今日は、「人の人たる所は、私心を除去するに有り」という言葉がわからないと言った。角田がよく、「松陰の本には当たり前のことが書いてある。退屈だ。」というので、「本を読む時は、自分に出来るかどうか考えながら読むことが大切だ。」と答えていたが、その意味で問題となるのは、この点だと思ったからだ。「なぜ、私心を除去しなければならないのか」について奥冨さんが考えよと言われた。大岡さんは、東中野さんのことについて話してくださった。又、「真空妙有」という言葉を出され、私心のない事、真空は妙なる有である言われ、立派な人物とは、私心のなさにかかっているという事に気づいた。今日の輪読会は、どうも発言が少なかったようだ。自分が、一人で考えればよいような問題を提起したからかもしれない。が、自分は、今日の部分を読んでみて、松陰との戦いの起こる所は、この部分しかないように思った。大岡さんは、勉強して妙なる有に触れなければならないと言われた。これは、今日の勉強では、松陰のすばらしさに触れるという事なのである。とすると、松陰の立派さに触れるということが輪読の一つの目的になる。文章から立派さに触れるという事がよくわからない。ましてや、角田にどう説明すればよいのだろう。ひょっとすると、輪読箇所を誤ったかもしれない。

18―3　昭和五十二年十一月九日「性と知」を輪読して（その一）

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

「人此の様の性を具ふるといふことを眞に落着する」という言葉について、松陰先生が仁義礼智という事を、真剣に求めていった末に、「自分の性に仁義礼智が具はっている」という事が本当にわかった、その結果の「落着する」という言葉ではないかと言ったら、大町さんより、「それより、例えば、顔をあわせる時に非常に開けてゆく思いがすることがあるが、何かを求めていって、やっと得られるものだと考えるより、身ののまわりのふとした一瞬にも、松陰先生の言葉に近づける時があるのではないか。」と言われた。その事が一番印象に残った。新入生が来てなくて奥冨さんに申し訳ないと思う。

18―4　昭和五十二年十一月九日「性と知」を輪読して（その二）

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

「性を知る時は、天を知る」という言葉が、なかなか「躍々として胸に迫る」というわけにゆかず、停滞してしまった。最後に奥冨さんより、「ここで言っているのは、聖賢の一つ上の事を言っているのであって、性を知るにはまず、性を養う、子どものように懐に入れて暖め、乳を飲ましし、天を知るにはまず、天に事（つか）える、父、君主に事（つか）えるように、天に事（つか）えれば、おのづと天を知るに至るのだ。」という御言葉があった。今日の輪読箇所は、難しかった。角田、小野、大岡さん欠席。

18―5　昭和五十二年十一月三十日「大節と学問思弁」を輪読して

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

全節伝、一節伝に別けられ、一節伝の人は「其の君を見ること逆旅（旅宿）の主人の如く」とある。主をかえるというのは、今ではどういう事に当るのだろう。という事を考えたが、斎藤実盛が関東の旧臣でありながら平家に仕えたという事がなかなかわからなかった。「大説大義」という言葉が重要であると気がついた。自分が仕えていた主人をかえるという事は、「大節大義に関ける」のである。この言葉も又、なかなかむづかしい。今日の輪読は少しむづかしい箇所で、言葉をたどるうちに、うきうきしてくるような感じがつかめなかった。

「学問思弁は固より日用常行の為なれども、日用常行は無学にても可也に出来る者衆ければ、是を以て学問思弁と罵るに足らず。」

土曜日までに、この感想文をまとめなければ！

18―6　昭和五十二年十二月七日「英才の教育」を輪読して

東京工業大学　工学部　三年　皿田　宏

「君子の任とする處は、天下後世にあり。」・・・「治乱盛衰の際会は、英雄豪傑の力を致すべき所にして、幸いに身其の時に遭はず、その期に當らざれば、天下後生の間必らず別に其の人あるなり。」松陰先生がこの文を書かれたのは安政三年五月二十日である。三百年近くもの安定し

た時代から、ようやく、ペリーが来て、プチャーチンが来て、海外では阿片戦争で清国が侵されてをる。激動の時代へ、突入し始めた頃である。

「英才を教育せずんば、何を以って天下を治めん」という言葉に切迫感を汲みとらなければならない。治乱盛衰の際會は英雄豪傑の致すべきにして」の文章の意味は、治乱盛衰の際うつりめの時期には、英雄豪傑が力を致すべき時代である。という事だろう。前に慶応の会で輪読したときには、ここの所の文章がつかめなかったが、今日はっきりした。

18―7　昭和五十三年「講孟余話」輪読会感想文集の　あとがき

毎回の輪読の後、五分から十分の時間を設け、感想文を書くことにした。自分が何を感じたか、何をつかんだかをはっきりさせるには、これが有効だと思ったからだ。各自書く様に書いた文だし、しかも短時間で書かねばならないので、まとまりのない文章になってしまうのは、ある程度しかたがない。輪読会の反省資料にでもなればと思い、これらの文をそのまま掲載し作り上げたのが、この「学びの道資料（昭和五十三年編集）」である。

（皿田記）

19．昭和五十三年東京地区秋季合宿記録集「御嶽」

東京地区秋季合宿記録集「御嶽」（十月二十一日～二十三日、東京都・御岳）より

東京工業大学　工学部　四年　皿田　宏

御岳なる友らの集ひに来てみれば新しき友ら六人（むたり）もゐます

大御歌心おきなく共に誦む友と思へばありがたきかな

（感想文）

合宿地御岳のケーブルカーを降りたところの展望台からの景色はすばらしく、これ程よい環境の中で行う合宿は初めてであった。この宿舎の段取りをしてくれた大塩君に感謝したい。

夜久先生の御講義の中で「さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきは心なりけり」の明治天皇御製につき『さしのぼる朝日のごとくさはやかな心』を自分は持っているという訳ではなく、持ちたいものだという願望の歌である」といわれたが、この御言葉が印象に残った。僕は先日「明治天皇御製研究」を一人で読んでいて「すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな」を拝誦した折、この歌が明治天皇御自身の述懐なのだと思いついた。それまで何となく、明治天皇に対し聖人君主的なイメージを持っていたのだが、その時明治天皇が非常に親しく感じられたのだ。そういう事があったので夜久先生の御言葉にはっとしたのである。

20．昭和五十三年　十一月九日の正大寮日誌より（須田清文君筆）

夜、奥富さん、大町さん、皿田兄来寮。歴生会の帰りに一杯飲んできたものだ。皿田兄が奥富さんから歴生会の卒業免状を許されたとの事で皿田兄はグロッキーになるほど飲んでゐた。秋合宿で西川兄からの質問に即座に答へられて、その内容が良かったためといふ・・・（東京工業大学　工学部　四年時）

21．昭和五十四年　霧島合宿

国文研班　　防衛施設庁勤務　皿田　宏

慰霊祭の準備に「しで」を付け申し上げる折

神々の降り給へる祭壇と思ひて心ただしたりけり

22・昭和五十四年　慰霊祭献詠歌

九月二十二日十四時　於　東京大神宮

学生と常に接触たもてとふ師のみさとしに目覚めしめらる

防衛施設庁勤務（横浜市）　皿田　宏

六　皿田君から大町へのお手紙（平成六年六月二十四日）

拝復

本日、お手紙頂きました。第一線のビジネスマンとして激務の中、このような御丁寧なお手紙を頂き恐縮しております。

さて、お手紙では、私の退会届につき、再考を、とのお言葉でした。ここで、退会の理由など、私の考えを申し上げたいと思います。

退会の理由は、国文研の教えに関心がなくなったからであります。国文研の教えは「自分の生命の根本は過去の日本人とのつながりの中にある」ということだったと思います。私は自分の生命の元にあるものはそういうものではないと思うようになったのです。そういう心が固まってきたので、今回の退会届を提出した次第です。国文研を離れるというのは本当の気持ちなので退会届をとり下げる考えはありません。この旨、長内先生にもお伝えいただければ幸いです。

先輩とは、東工大時代、遊びも勉強もずい分とお世話になりました。長内先生のお宅に伺った時のことも忘れられない思い出です。国文研退会後もおつきあい下さるようお願い致します。

それでは、先輩のご健闘をお祈り致します。お客様を大切になさって下さい。奥様、ご両親様のご多幸を心よりお祈り致します。

敬具

皿田　宏

平成六年六月二十四日

大町　憲朗　様

〒０６４　札幌市中央区南五条西二六　二―二二　一〇三

大町　憲朗　宛

〒８６２　熊本市栄町二―一八　一―二六

皿田　宏　兄より

七　友よりの皿田　宏君を偲びての追悼文と献詠

1．　元電源開発（株）元開発電子（株）取締役　青森市　長内俊平（九十歳）

「皿田宏君を偲びて」

（皿田君を偲ぶ一文をといふことで、何を書かうかと思ってゐたら、青砥宏一君が「長内！こっちへ来いよ」と言った様な気がしたので、二階の本棚の前に立ったら、自然に手が延びて行ったのが「青砥通信」第十九号（昭和四十九年四月）から四十一号（昭和五十一年十月）までのファイルだった。はやる心をおさへつつひもといてゐるうちに、別添の拙歌が出て来たのです。それは自分でも書かうと思ってゐたことだったのであまりの嬉しさに、それを清書し、これを以って「皿田君を偲びて」に寄する言葉とさせて頂きます。）

昭和五十年三月五日、東工大、大町、皿田の両君来訪、その様を奥冨君に知らせむとて詠める。（当時、小生、電発の北海道と内地を結ぶ海底送電線布設工事のため函館に居住）

妻と娘は街へ出かけぬ若きらに何馳走せむと語り合ひつつ

若きらが訪ひ来る今宵はいくたびも時計みやりて落着かぬかな

コーヒーを出して語らはむかはるばると来つる友らなれば御酒を酌まむか

友を待つわが立居みて妻と娘の「気軽に迎へよ」とさとすもをかし

待ちわびし若き友らの声すれば出で立ち行きて友を迎へぬ

正大寮の昔語りに花咲きて御酒勧むなり若き友らに

緊張のややほぐれしゆ皿田君は折々人を笑はす仕草す

皿田君は面白き男よ一言にして君が家訪ねし様を彷彿せしめき

興じきて友らは歴生会の歌うたひ妻も娘に和して唱歌もうたひき

こころなることのくさぐさ心知る友と語らふ今宵嬉しき

夜も更けぬ酔も廻れるいまはとて帰りゆきけり友を抱きつつ

雪解けの道よろけつつゆく友らの姿はやがて見えなくなりぬ

み友らと離りて住める我なれば訪ひ来る友の数ぞ少なき

再びも門を訪ひ来むみ友らの清しき声を今よりぞ待つ

吾家をつね訪ひたしと言ふと聞く松藤君になにとぞよしなに

最後に、おほけなけれど、明治天皇御製

夢（明治三十七年）

今も世にあらばと思ふ人をしもこの暁の夢にみしかな

を拝誦しまつりつつ「皿田君を偲びて」の一文を閉ぢさせて頂きます。

2．東急建設（株）元常務取締役　川越市　奥冨修一（六十四歳）

「皿田君を偲んで」

今から四十年ほど前の一時期に東京工業大学において読書サークルが活動を続けてゐた。その読書会の名前を「歴生会」（歴史の中に生き方を探る会）と呼んでゐたが、命名したのは活動の中心であった現役の布瀬雅義君たちであったと記憶してゐる。国文研の夏合宿に参加した人たちが中心となってこの読書会を立ち上げるやうになったのだが、布瀬君が入会してくるまでには、私と同期（建築）の大岡弘君が院生として学内に残ってゐたので、彼を中心にして建築学教室を借用して勉強を続けるかたはら、学生勧誘に力を入れてメンバーを増やす努力を重ねてゐた。

皿田君が入会した年にはすでに布瀬君が最上級生となってゐて、三年生の故島崎祐司君、二年生の古宮良英君、大町憲朗君たちが連なってゐて、皿田君は新入生として暖かく迎えられた。皿田君は入学と同時に水球部にも入部してをり、運動部の練習と読書会が重なる時がしばしばあったやうだが、遅れても必ず参加してくれてゐて、結局運動との両立を成し遂げたのだった。私自身は、学生のときはボート部に在籍してゐて、合宿教室への参加はできなかったので、彼の両立へのひたむきさには今にして頭の下がる思ひである。

当時の歴生会は短歌創作にも力を入れてゐたわけだが、皿田君は入学してまもない六月に行はれた歴生会の一泊合宿（大原）では五首の連作短歌を創作した。私はこの合宿には参加してゐないが、彼は連作の最後に

初めての合宿に我寝つかれずとなりの先輩のいびきもうれし

と歌ってゐる。当時、私はこの歌に手厳しい批評を加へてしまったが、今あらためて読み返してみて、更にまた、その後の彼との付き合ひを通してみると、その飾り気のない人柄が良く表現されてゐたのだと、申し訳ない思ひになる。

この年の秋に開催された同じ「歴生会」の合宿（大洗）では八首の連作を創作してゐる。この時の連作は合宿当日に私の長女が誕生したので、その時の喜びを約二十首の連作にして合宿所に電話連絡し、参加者に紹介してもらったのだが、その歌を聞いたときの彼の心情を余すところなく歌にしてくれてゐた。

このやうにして短歌の創作を重ね、短歌の本質への理解の早かった皿田君は二年の秋合宿で「短歌について」といふテーマで研究発表を行った。その中で、彼は「歌を創ると自分の経験をまう一度よく思ひ返してみることになります」と表現してゐる。歌を創ることは自分の体験の意味をふりかへることであることを、私などはつひ忘れがちであるが皿田君はこのとき既にこの歌の本質を理解してくれてゐたのだった。

いつのことだったか、まう記憶がはっきりしないが、皿田君と徹底して酒を酌み交はしたことを覚えてゐる。正大寮の須田君の寮日誌に皿田君が四年生の十一月に「皿田兄が奥冨さんから歴生会の卒業免状を許されたとのことで、皿田兄はグロッキーになるほど飲んでゐた」とあるのでそのときのことかもしれない。皿田君は良く話してくれ、私もありったけのことを話した。友とのこと、人生のこと、話題は多岐にわたったが、彼の内面に起伏する多感な心情の一部を垣間見せてくれた。たいしたアドバイスもできなかったのだが、青春のまっただ中にゐた皿田君の印象として一番強く残ってゐる。

今でも、告別式に参列できなかったことを悔やんでゐるが、あらためて皿田君のみ魂のご冥福を祈る。

思ひ出を綴りてゆけばありし日の君のしぐさのまなかひに立つ
今一度歴生会のみ友らと君を交えて神酒を酌みたし
遺されしみ文み歌に若き日のますらをぶりの偲ばるるかな

3．元宇部興産（株）ＳＩＳ㈱　宇部市　内田厳彦（六十五歳）

「皿田宏兄を偲びて」

皿田君の思ひ出は遠いが、一度しか会っていない彼の印象は何故か強く、僕の胸の中の皿田君の面影は大學一年生の時のままの姿である。それは今から三十八年前の昭和四十九年年に、我々の母校・東京工業大学の施設がある、茨城県大洗海岸の宿舎で行はれた、「歴生会」の始めての合宿にまで遡る。

当時、私は千葉県市原市にある会社に勤務してゐたが、合宿への参加の案内を受け、心踊る思ひでこの一泊二日の合宿に出かけたのであった。

同友の大岡弘兄・奥富修一兄、布瀬雅義兄、中心メンバーとして当然参加されてゐたが、大町憲朗兄、古宮良英兄、植田伸一兄、島崎祐二兄（故人）などの後輩達を一度に紹介され、学内の公認団体でも何でもない読書会をここまで発展させてくれたことにまず驚いた。

それは、当時全国の大学・高校で吹き荒れた学園紛争の後も学内に残り、或いは社会人となっても母校に出入りし、或るいは学生として毅然

とした態度で読書会を続けた、大岡兄・奥富兄・布瀬兄達の「志し」の成果に違ひなかった。
最初に後輩達を紹介された時のメンバーの中には、皿田君はいなかったが後ほど彼は一人でひょっこり現れた。
（恐らく宿舎の側の海岸で貝堀りを先輩たちと一緒に楽しんだ後、宿舎に戻るのが遅れたのであろう）
坊主に近い髪型で痩身の彼は、紹介されると人懐っこい笑みを浮かべて挨拶してくれたが、その清々しくも、やや剽軽（ひょうきん）にさえ見える風貌は今でも鮮やかに印象に残ってゐる。
今にして思へば高杉晋作のようなザンギリ頭であった。
一年生で合宿に参加してゐるのは皿田君だけだったので、合宿でどのやうな発言をするのか注目して聞いたやうに思ふ。その時の内容は失念してしまったが、皿田君の発言の内容は「非常に率直だった」といふ印象が残ってゐる。
一泊二日の合宿はあっという間に終ったが、「こんな楽しい合宿は始めてだ」といふ布瀬雅義兄の言葉にも代表されてゐたやうに、参加者が同じ大學の門に学ぶ者ばかりならではの和気藹々（わいわい）とした合宿であった。
「皿田が一番凄い」と大岡兄が小生に呟（つぶや）くやうに言ってゐたのを今でもはっきりと覚えてゐる。
その後、私の転勤や私的な都合で国民文化研究会の夏合宿に殆ど参加しなくなった事等の理由から、皿田君と顔を合はせることはなかった。
彼が四十歳位になったばかりの若さで亡くなられたことを知ったのは、まうそれから随分年数が経った後であったが、これからといふ時の後輩の早逝は何とも言へぬ残念な思ひであった。
皿田君の書き遺した数少ない文書の中で、読書会の記録を彼が書き遺してゐる。
これを読んでゐると、理工系特有の忙しい学生生活の中で読書会のメンバーとして真剣に取り組んでゐた様子が伝はってくる。
彼は納得が行かないことには何処までも納得するまで、議論しないと気が済まない性格であったやうに思ふ。それは輪読会の記録からも窺へる。

吉田松陰先生・・「講孟余話」・・母雛の専精・・の箇所の輪読で
大町兄の解釈を受けて、いろいろ疑問を投げかけてゐる。
彼は一見理詰めの人のやうに見えるが、実際は子供のやうに純真で率直な心の持ち主であったのではなからうか。
彼との付き合いが短か過ぎたばかりに、想像でするしかないのだが、私の中の皿田兄は大洗海岸の宿舎での合宿で会った時の印象が全てなので

ある。

宇部市　内田　厳彦

皿田　宏くん　の遺稿に寄せて（昭和四十九年年東工大大洗海岸での合宿を思ひ出して）

御友（みとも）らは地道なる研鑽重ねけむ母校初の合宿（つどゐ）持つまで

馳せ来れば御友ら数多（あまた）集ひ居り総勢九名と夢の如しも

待ち居りし期待の後輩（とも）の現れぬその姿（かげ）珍し羅漢の如きも

大洗海辺（おおあらいうみべ）の浜の貝堀りに先輩（とも）らと共に興じられしか

お互いに周防の地に＊縁あるを名乗りて後輩（みとも）としばし和みぬ

読書会の記録（大岡兄のノート）を読んで

皿田君の学びの日々の垣間（かいま）見ゆよくぞ記（しる）せし友のノートは

＊　：皿田君の出身地が（徳山）であること。
私が宇部興産に勤務していたことを指す。

4．SEWS―CABIND社　社長　在イタリア・トリノ市　布瀬雅義（五十七歳）

「皿田宏兄を偲びて」

学生の頃、皿田君とは東工大「歴史の中に生き方を探る会」の輪読会、合宿、飲み会などでいつも一緒にやってゐたが、私の記憶の中の彼はいつも、にこやかに、穏やかに、控えめに、そしてどこかとぼけた表情をしてゐる。怒ったり、緊張したり、落ち込んだりしてゐる彼の姿は、決して浮かんでこない。　今回の遺稿集の編集で、彼の学生時代の文章を読み直してみたが、そこから浮かんでくる彼の姿勢もやはり、穏やかで、控えめなものであった。

就職し、結婚してからの彼の写真を大町兄から何枚か見せて頂いたが、そこに映ってゐる彼の姿も、やはり私の記憶のままの皿田君であった。学生時代の彼との唯一の違ひは、仕事柄か、やや頬がこけて精悍な顔つきになった事と、横に奥様がいらっしゃることである。

彼の穏やかな性格からして、きっとお二人で和やかな家庭を築かれてゐたのだらうと想像する。カナダやシンガポールでの写真もあり、二人でたびたび海外旅行も楽しまれてゐたのであらう。渡る世間に波風の立たないことはありえないが、彼の穏やかな性格、広やかな心からして、それらの多くを胸中に飲み込んで、奥様とは和やかな家庭生活を営まれてゐたのだろう、と拝察した。皿田兄の葬儀に私も参列させていただいたが、彼との最後の別れの時、奥様が柩に抱きつくようにして、「もう少し一緒にゐたかった」と泣きながら言はれていた光景が、昨日の事のやうに思ひ出される。柩と奥様を囲んでゐたご両親、ご親族の方々も、同じ思ひであったに違ひない。この追悼文を書きながら、もう皿田君とは会へないのか、と改めて思ふと、かけがへのない人物が失はれてしまった、といふ思ひが迫る。奥さんにとっても、ご両親にとっても、そして、我々友人にとっても。ただ、彼のあまりに短い人生において、奥様との幸福な家庭生活の一時があった事が、我々にとっても救いである。

カナディアン・ロッキーでの皿田兄と奥様の写し絵に

ロッキーの山の上なる写し絵に二人の姿楽しげに見ゆ
我もまた妻と訪ねしロッキーの山の姿はそのままなりし
学生の頃より変はらぬ和やかな面映（おもは）懐かし君の笑顔は
睦まじく二人並びて楽しげな旅の様こそ思ひやらるれ
末永く助けかはして暮らさむと思ひしならむを若き君らは

5．元ＪＴＢ伊勢営業所所長　岡崎市　松藤　力（六十歳）

「皿田君への献歌」平成二十三年三月十八日

正大寮にて

輪読後語る言葉は少なくも素直な心伝はりにけり
合宿の感想文をガリ版で共に作りぬ夜の更けるまで
水球のクラブ帰りに飛び降りて脚を痛めたと嘆く日もあり
唯一の息抜き麻雀目の色をキラキラさせて打ち込みしことあり
熊本での葬儀の折、奥様と語りて
奥様と暮らせし日々は短くも麗わし様を見るが想ひす

6．（株）イオンフォレスト　ザ・ボディショップ　取締役　東京都　古宮良英（五十六歳）

「皿田宏兄を偲びて」

皿田兄は布瀬大兄に歴生会への参加を促されて、参加をされたと記憶しています。

歴生会は、東工大の社工棟の部屋を借りて輪読会を行っていました。橋本左内の啓発録、吉田松陰の講孟余話、日本書紀等を輪読していたと思います。当時、布瀬大兄、大町兄、皿田兄と私の四名が現役で、奥冨大兄、大岡大兄がＯＢで、他大学から松藤大兄が参加されてました。

皿田兄は水球部にも所属しており、プールでの練習後に、髪の毛が濡れて、「遅れてすみません」と言って部屋に入ってこられたのを思いだします。

輪読会後に時々、お酒をともにしましたが、非常に明るく、饒舌になり、顔を赤くして他の皆を楽しませる、ひょうきんなところがありました。

防衛施設庁に就職が決まり、卒業後にお会いした際には、精悍な顔つきに変わっておられ、仕事柄なのか、年齢を経たせいなのか、びっくりしたことを覚えています。

訃報の連絡を受けたときは、あんなに精悍で頑健な体の皿田兄が病魔に侵されるとはと、さらに驚きと悲しみにいっぱいでした。一体何があ

ったのかと心の中で繰り返しました。
この度、大町兄よりの依頼を受け、思い出をまとめているうちに、大洗海岸での歴生会の夏合宿や国文研の阿蘇の夏合宿歴生会に一緒に過ごしたことを思いだし、皿田兄のご冥福を改めてお祈りいたします。
大町兄や私の心の中に思い出がある限り、皿田兄はまだ生きています。大町兄と居酒屋で飲んでいると「遅れてすみません」といって再会があるような気がします。

7．興銀リース（株）執行役員　東京都　小柳志乃夫（五十四歳）

「皿田宏君のこと」

昭和五十一年の春、皿田君が正大寮を退寮した後に、同じく同級の須田清文君と僕が入寮した。皿田君はその後もよく寮に訪ねてきてゐたが、具体的に何を話したかといふとどうも記憶がはっきりしない。残念なことである。仲が悪かったわけではないが、時折意見がすれ違って酒の席などで言い争った印象があって、二十代の終り頃であったらうか、これも理由は覚えてゐないが喧嘩別れして結局その後会はないままだった。銀座で別れた光景は覚えてゐる。僕は生意気だったし、皿田君は直情だった。
とはいへ今はただ懐かしい友である。学生時代の彼は水球で鍛へた逆三角形の立派な体躯で、小さな眼はキラキラ輝いてゐた。心のきれいな男だった。当時の資料をひもとくと、大学二年生のときの彼の歌がでてきた。

国文研事務所に発送作業の手伝ひに行きて
なにげなく受けとる封書にこれほどの手間がかかることはじめて知りぬ

この歌にも、いかにも彼らしい飾らない心がよく現れてゐると思ふ。
当時は合宿への学生勧誘のため、色んな大学に出向いては説明会を開いた。まづは説明会に来てもらふ為、ビラを大量に印刷し、朝の校門で配る。そのビラは菓半紙に寮の輪転機を回した「ガリ版刷り」で、一千枚も作るのだからさうさうきれいなビラができるわけではない。僕は見た目のきれいな活版のカラーのビラだったら、学生も受け取ってよく読んでくれるだらうにと思ってゐた。しかし、皿田君は違った。ある時、寮に来て刷りあがりの悪いビラを手にした彼は、〃かういふビラがいいんだよ！　町で配られるやうなビラはすぐに捨てちゃうよ！〃と語った。忘れられない言葉である。世間に受け容れられるやうな恰好を気にしてゐた僕と未完成の土の匂ひのやうなところに惹かれてゐた彼と、今思へば、そこに意見のすれ違ひのきっかけもあったのだったらうか。

つき合ひが途切れた後、皿田君の話を聞いたのは同じ防衛施設庁に入ったやはり同級の山根清君を介してだった。山根君が在任中懸命に取り組んだ硫黄島を先に経験したのは皿田君である。山根君の言葉を正確に覚えてゐないのだが、皿田君が硫黄島の宿舎で怖くて眠れなかったと話してゐたと聞いた。山根君もまた硫黄島での夜のことを、「その島で戦ひ斃れてゆかれた人々のことを思ふと自分の胸が締め付けられるやうな物理的な力を感じて一晩眠れなかった」と語ってゐるが、純粋な皿田君の心に亡きみ霊はうつつに感じられたのであらう。そこには皿田君と山根君の深い共感があったことだらう。

山根君には皿田君を偲ぶ歌が残されてゐる。遺稿の手控へを見直すと、遺稿集に掲載してゐない歌が見つかったので記しておきたい。皿田君のなくなった平成八年の秋の慰霊祭に山根君が大阪から上京したときの歌である。

残されし君がうつしゑ見てもなほ君逝きしこと夢かと思ふも
ゑまひたる君がうつしゑ見ればなほ君健やかにありと思ふも

その一年後の慰霊祭の献詠歌は、遺稿集にも掲載してゐるが、そのうちの一首。

先逝きし友のいまさば酒酌みて語りたきことあまたあれども

山根君と皿田君は今ごろ何を語りあってゐることであらうか。

○

（歌）

隠り世に友らかたみに酒酌みて語りまさむとともしみおもふ
その姿、その目、その声なつかしくしのばるるかも若き日の友
年上の君に甘えし我なりけむ君よ無礼をゆるしたまへや

8．秋田県　羽後信用金庫　由利本荘市　須田清文（五十五歳）

「皿田宏兄を偲びて」

夜中に電話がかかってきた。島崎祐司さんの死を告げる皿田君の悲痛な声が響いた。

君の声いつもと異なり何事と思ひてきけば　悲しき知らせ

君の声に君の悲しみつたはりて心うごけどせんすべもなし

昭和五九年二月十一日三十歳で亡くなられた島崎祐司さんへの思ひ溢れる皿田君の声は今も私の心の中に響き渡ってゐる。

正大寮時代に代々木の皿田君のアパートを訪ねた。樽酒が飲める近くの居酒屋で歓談しまたアパートに戻り語り合った。水球部ではゴールーキーパーをしてゐて相手のシュートが来ると一瞬のうちに水中で腰まで出る位のジャンプをしてゴールを守る、手でも胸でも腹でも顔を使ってでもシュートを防ぐんだと力説した。また、俺はどんなに強い相手と喧嘩しても絶対に負けない、最後の手段で相手の睾丸に食らひつき、殴られても蹴られても絶対に離さないんだ、と真面目な表情で話してくれた。

ある時、大学ではどんな勉強をしてゐるのか尋ねたことがあった。その時、道路の高架橋には継ぎ目があり蝶番がついてゐて温度による伸縮に対応できるやうになってゐることや、空港の滑走路や道路は平坦に見えるが微妙な勾配がついてゐて雨水が溜まらないやうにしてあることなどを話してくれた。

昭和五十四年に青森の長内俊平先生を訪ねられた後、皿田君は秋田のわが家を訪れてゐる。『青砥通信鈔』１０６頁の長内先生の歌。

秋田の須田清文君に会ひに行く皿田宏君に託せしうた

志功を好きと言ふ君への土産（つと）とせむ友と賞（め）でたる絵の複製（うつしゑ）を

その時頂いた棟方志功さんの絵に感動して和歌ができた。

まなこしかと見ひらきひたすら走りゆく志功の風神すさまじきかな

この「風神の柵」とともにわが家を訪ねてくれた皿田君のことは私の胸に残ってゐる。

最後に会ったのは山根君の結婚式の時であった。防衛施設庁の凛々しい制服姿で君は升酒を持って来てくれた。

風に吹かれながら立ってゐる写真つきのいつかの年賀状に「酒を飲み過ぎるなよ」と書いてあった。硫黄島にてとその写真のわきに書かれてゐ

た。山根君も皿田君も硫黄島の得体の知れない大きな力の影響を受けたのであらうか。

うちに秘めし負けじ魂語りたる友のかんばせ今もうつつに

得意げに笑みを浮かべて歩きつつ語りし友の姿浮かびく

先輩の死を告げたまふ君の声今もうつつに響きわたりぬ

独特な風貌で、独立独歩の根性を持った、こころねのやさしい皿田君とまた会ふことはかなはない。

君の死を知った後、一家で毎年恒例の善宝寺参りに行った。丁度、桜の見頃で、通り慣れた道路ではあったが、こんなところにも桜があったのか、と気付かされながら運転して行った。満開の桜並木を通りながら皿田君のことが思ひ起こされてならなかった。

9. New Dynamic Asset Management Pte Ltd Director　東京都　小田村　芳忠（五十四歳）

「皿田宏兄を偲びて」

私が慶応大学2年生の時、東工大歴生会の勉強会が大岡山（東急目蒲線）東工大キャンパス社会工学棟の会議室で、毎週1回夕方行われていました。学校が東横線の日吉駅でしたので、大岡山駅は、自宅に帰る途中ということもあり、布瀬大兄と大町兄からのお誘いがあり、時々参加させていただいておりました。

私がお伺いしていた頃は、歴生会では古事記を輪読していました。また、私にとりまして勉強会後に東急緑ヶ丘駅（社会工学棟のすぐそば）の近くの居酒屋で、故島崎大兄、古宮兄、大町兄、皿田兄と時々は、奥富大兄、布瀬大兄も参加されて語ることが大変有意義でありました。

皿田兄は、私より一つ年上でしたが、土木工学科の2年生で同学年ということもあり、きさくになんでも話しができる友人でした。

当時、東工大水球部で活躍されておられたので、練習で真っ黒に日焼けされており、分厚い胸の大変たくましい体型で、練習後勉強会に駆けつけて来られておりました。

居酒屋では、奥富大兄、故島崎大兄、布瀬大兄のお話に、日ごろはひょうきんにもかかわらず、煙草をくゆらせながら、大変真剣なお顔で静かに耳を傾けられていたお姿が、目の前に浮かんでまいります。

皿田兄も難関な東工大に入学されているので、私からみると理数系には大変優れていたとお見受けしましたが、私にはよく「布瀬さん、大町さんのような頭のいい人には今まで会ったことがないよ」とおっしゃられ、ご自分が普通より優れておられることを、少し照れ屋でもあったた

めか、おっしゃいませんでした。
将来工学の研究者を目指されていたのか、ある時私がご紹介した、「天風会」という団体に興味を持たれました。この会は、人間の手の平から出るパワーを高めることで、無敵の力を身につけられるという修行をする会です。
私が、この会のパンフレットをお見せすると皿田兄は、大変興味を持たれ、科学的な見地から実証されたいと思われました。そこで私と二人で、八月の一日、文京区の護国寺で開催されました体験研修会に、参加いたしました。結果的には、一日の研修では無敵の電磁波、パワーを身につけることは無理で、私は真夏で暑いし、もうこりごりと思いましたが、皿田兄はずいぶんと満足され、研修で教わった、呼吸法、念力の集中法等をしばらく実践されていたようです。
私が住んでいた白金台の自宅の庭の先に、祖母（小田村治子）所有の古い平屋の日本家屋があり、「正大寮」として国民文化研究会が借りられて、学生の方々が寮生活をされておりました。（現在は、古い自宅も正大寮も取り壊し、同じ場所が父所有の近代的なマンションとなっております）

その「正大寮」に、皿田兄もしばらく寮生として研鑽されておられました。
東京育ちで世間知らずであった私には、地方から来られて生活されている寮生方の暮らしぶりやお話は、大変めずらしく興味があり、高校生の時もときどき遊びにいっておりました。
皿田兄は、夜遅く不勉強な私が、寮に庭続きに遊びに行くと、ときどき「今、「楽衆軒」から餃子を出前で頼んだから、芳忠もみんなと一緒に食べて行けよ」とまじめな顔つきでおっしゃって、寮内に招いてくださるような大変実直で優しい方でした。
難しい輪読会などにあまり参加せず、勉強がきらいな私に対して、大変親切に誠実にお付き合いしてくださる皿田兄は、わだかまりなく気楽におはなしができる友でありました。もし皿田兄が今御存命であれば、現在白金台の目黒通りのビルに建て替わった、かつて、餃子を出前でとっていた「楽衆軒」へお連れして、二人で楽しく語りながらご一緒に餃子を食べてみたいと思います。

＊楽衆軒：昔から白金台交差点近くにある中華料理屋。当時は、深夜2時ごろまで出前を配達してくれた。掘立小屋のような汚くて小さい店であったが、目黒通りの拡張の立ち退き保証により現在は5階建ての自己所有ビル1階に台湾料理「楽衆軒」として営業している。

10・㈱ＩＨＩエアロスペース　千葉県印旛郡　内海　勝彦（五十五歳）

「皿田　宏先輩を偲びて」

皿田　宏さんは私の二年先輩でした。まったく飾るところのない飄々とした人物との印象でした。当時白金台にあった正大寮を訪ねてこられた時には、いつも率直に意見を述べられてゐたことを思ひ出します。

大学卒業後は、互ひにお会ひすることもなく年月が過ぎました。防衛施設庁に奉職されてゐた頃、いつでしたか、同じく防衛施設庁に勤務されてゐた山根　清さんを私が訪問した際に、皿田さんも同じ施設庁にゐるよといふことで皿田さんの職場に連れて行ってもらったことがありました。ちょうど昼休み時間でしたが、皿田さんはカップラーメンを食べてをられました。たぶん、役所の予算業務等で丁度忙しい時期だったのでせうが、いつものはにかむやうな笑ひで「よおー」と声をかけて下さったことが懐かしく思ひ出されます。今から思ふとこれが本当に久しぶりの再会で、最後の再会ではありました。

その時の山根さんも今は亡く、本当にさびしい限りです。お二人は今頃天国でどんな話をされてゐるのでせうか。日本の防衛のあり方や国の行く末をきっと論じてをられることでせう。山根さんは切々と、そして皿田さんは飄々と。

皿田先輩と奥様の写真を拝見して

久しくも忘れてありし先輩の面輪うかびくこれの写真（うつしぶ）

奥様と並んで撮られし写真（うつしぶ）に仲睦まじき様のしのばる

リュック背に手を携へておちこちに旅されし様目に浮かびくる

11．（株）三井三池製作所（東洋精密プレス）　神奈川県　阿川信次（五十三歳）

「皿田さんとの思い出」

私が皿田さんと初めてお会いしたのは、東京都港区の白金台にあった正大寮においてであった。

当時、私は大学に入学し、高校時代の恩師　志賀先生の勧めで正大寮に入寮させて頂くお礼や、御挨拶、田舎から母と二人で上京し、当時、寮生であられた小柳さんと、須田さんのお二人の先輩に御挨拶させていただいた。その後、入寮は、国文研の夏合宿未体験の故をもって、見送りとなったが、まだ、入寮前提で入寮の準備や寮での勉強会への出席などで、正大寮に出入りさせて頂いた頃に、皿田さんや大町さん、石井さん、松藤さんに大変お世話になった。

皿田さんには、私の買い物、ズボンの替えの買い物に付き合って頂いた。皿田さんの案内でお店まで行き、ズボン選びを一緒にして頂いた懐かしい思い出がある。その買い物の行き帰りに色々話しをした。皿田さん曰く、自分は、こうみえても水球をやっていて水の中では動きが速いんだ。とか、コーヒーを入れる時は、コップにコーヒーと砂糖を入れた後すぐお湯を入れず、一度コーヒーと砂糖をスプーンでよく混ぜてから、お湯を入れるとおいしいコーヒーがいれられる。といった話をして頂いたことをお覚えている。

その後、正大寮での勉強会や合宿を通じて接して頂いたが、その飾らないお人柄は、お会いして以来ずっと変わらず、私のような者にも親しく接して頂いた皿田さん。本当に有難うございました。

12．日本ユニシス（株）担当部長　札幌市　大町憲朗（五十六歳）

「皿田宏兄を偲びて」

私が東工大の二年生の時、「歴生会（歴史の中に生き方を探る会の略称）」に、布瀬さんの勧誘で、皿田君は、参加された。徳山出身の素朴な性格は、会にすぐに馴染んで、皆をひきつけるものがあった。水球部にも所属し、キーパーといふきついポジションにつきながらも、歴生会と両立し、会に出席し皆が口に言ひ出せない素朴な疑問を皆に投げかけ、等身大の姿に私は羨ましいとも思ったことを記憶してゐる。その後、皿田君は正大寮に入寮し、夏、春と、国文研の合宿をともにした。その後、お互い、実家に遊びに来ないかと、話は進み、昭和五十年三月に、皿田君は、私の実家、函館に来てくれた。スキーははじめてといふ彼を誘ひ、仁山スキー場に二人でいった思ひ出が忘れられない。運動神経が良いからか、すぐにスキーを滑りこなしてゐた。

その函館の日々の中で、当時、函館東高校の裏の住宅地にお住まひの長内先生のお宅を訪問し、たいさうご馳走になり、感動のあまりか、二人で、酔ひを深め、深夜、先生ご夫妻にお見送りされて、肩を組んで、帰宅したことが忘れられない。皿田君は、長内先生のことをすごい人だ、あんなすごい人に会ったことがない。「かす汁」は最高にうまかった、と、繰り返した。長内先生は、慣れていらっしゃったのか、酔ふ私どもを、自然体で「トイレは、こっちだよ、皿田君。」と、トイレと思ってベランダに駆け寄る皿田君をうまく導いてくれたり、長内先生ご夫妻に包まれるやうに過ごした五時間ほどのひと時は、生涯の貴重な思ひ出となった。

卒業後、私は日本ユニバック（赤坂）、皿田君は、防衛施設庁（六本木）に勤務し、勤務地が近く、何度か、昼食をともにし、合宿勧誘の相談をした。卒業後にもよく会った。ある日、私は、業後、六本木の防衛施設庁を訪問し、職場を訪ねた。彼は、私に気付かずに、もくもくと、机に向かひ、予算の概算要求書を書いてゐた。その姿は、あまりに一心不乱で、かなりきつさうだった。ふと、私に気付き、施設庁の食堂で、夕食代わりだからと、山盛りの焼き鳥を、大ジョッキーのビールとともに食べ、日頃の互ひを語った。「毎日深夜まで仕事だから、きついっすよ。」と言っていたのが印象的で、今思ふと毎日のやうに、体を酷使してゐたのではないかと思ふ。防衛施設庁に合格した際を思ひだす。正大寮を出てから、相当勉強したのだらう。難関を突破し合格した。頭のいい彼であった。「面接の際に、『日本の国を守る仕事につきたいと思ってをります。』と自然に僕の口から言葉に出たんですよ。」といってゐた。表面に出さず、饒舌にもあらず、ひたひたと、自分の進路を等身大の自分と照らして進路を決めたのではないだらうか。信念の強さをいまさらながら思ふ。

その後、硫黄島への赴任、九州と、転勤は続いた。九州から東京に戻った時であらうか、「私、結婚します。」と、唐突に言ひ出し、若い年齢で、結婚された。九州でのご縁とのことで、その後も電話で奥様とも何度かお話しでき、仲良くさせていただいた。その後数年が経過し、国文研を退会したいとの連絡があり、手紙をいただいた。（本編に掲載）長内先生にも相談されたといふ。燃焼しつくしたのだらうか。一心不乱に凝縮した時間を進み、出した結論だと、受け止めた。退会後も、お付き合ひくださいといふ一文が救いだった。電話をした際、体調があまりよくないんです、と、語ってゐた。年賀状も続いた。硫黄島を背景とした年賀状が印象的であった。

平成八年四月二十八日早朝に奥様からお電話をいただいた。訃報であった。愛妻家の皿田君。奥様の悲しみは計り知れないものだったと思ふ。幸い、ご縁を得て昨年夏奥様と十四年振りに再会でき、今も皿田君が奥様の中に生きてゐることを改めて知り、短い時間の中で、彼は生を全うしたのだと確信した。

昨年夏に、周南（旧徳山）の実家にもお伺ひし、ご母堂にも再会できた。残念ながら、ご尊父は、平成十四年に他界されてゐた。皿田兄のことを大そう悔やみ、お元気になられることはなかったといふ。本当に運命を悲しんでつきないものがある。ご自宅は、学生時代にお伺ひしたそ

のままのご自宅であり、皿田兄の部屋も空き部屋ながら、泊った時を彷彿するものがあり、私は長らく彼の部屋の中に佇んでゐた。お墓は、無量寺といふ近くのお寺であり、ご母堂の案内で、夏の晴天の日にお参りさせていただいた。お寺の前には、多くのお地蔵様が、お寺を守ってゐた。そのお地蔵様は、赤の毛糸の帽子を各々をかぶってゐた。ご母堂が毛糸を編んでかぶせてあげたものとのことだった。皿田兄への愛情を感じないではいられなかった。

あまりにも若すぎる生涯。しかし、今も延々と、奥様、ご家族、私らの中に生き続けてくれて、見守ってもらってゐると確信してゐる。

ますらをのかなしき命亡き君に見るぞ悲しきなぐさむるものなし
愛（め）されしとふ奥様の眼（まなこ）らんらんと君の話に話はずむも
テレ屋とふ君の心にますぐなる強き心を見るがうれしき
ひたむきに生きる姿を君の文章（ふみ）に読みまつりゆき心にしむかも
周防の地伺ひますればご母堂のあつきみ心感じやまずも

13．元富山工業高校教諭　小矢部市　岸本　弘（六十五歳）

「皿田兄の写し絵を拝見し」（平成二十二年九月五日）

若き日に見し面影のいちじろく浮かびあがれりこの写真（うつしゑ）に
目の細く言葉少なき友とのみその面影を求めし吾は
たくましき男児（をのこ）にありし三十代を生きし思ひ出今たどりゆく
いつの日もかたへにありし奥様と会ひまつる思ひに写真を見る

○

みまかりし友を忘れ得ず合宿の帰り路にたどりし君の旅を思ふ（大町兄を）

天翔（あまかけ）る友のみ魂は高空ゆ君の旅路を見そなはすらむ

世にあるもなきもおなじと歌はれしみ祖（おや）の歌のまたなつかしも

14・熊本市役所　熊本市　折田豊生　（五十九歳）

「皿田宏兄の写し絵を拝見し」（平成二十二年九月五日）

メール、有難く拝読。

皿田君の顔を忘れかけてゐました。

写真を拝見して、色々と昔のことなど思ひ出し、感無量です。

最後の勤務地は熊本で、御葬儀も熊本であり、御病気が重篤であると知らなかつたので、まさかと思ひながら参列したことでした。

寡黙であられたので、私は余り語り合ったことはありませんでしたが、誠心誠意一徹のお人柄だつたといふ印象があります。

あらためて御冥福をお祈りします。

まごころの深かりし友の一徹のみ姿を思ふ君がメールに

添へられしうつしゑのまなざし静かなるを見ればまぶたの潤みくるかも

国のためこころくだきて学びゐし友がみ思ひ継がざらめやも

亡き友を思ひてみ文綴る君のみ思ひ偲ぶ胸濡らしつつ

八「あとがき」にかへて

奥冨修一

大町君の「はじめに」に記されてゐるやうに本遺稿集出版の経緯は企画・編集の大半を彼が一人で成し遂げてくれてゐるので「あとがき」の本来の適任者は彼なのであるが企画の当初から相談にあづかってきた一人として多少の感想をのべさせていただく。

「歴生会」といふ言葉が度々出てきてゐるが、東京工業大学に一時期存在した有志による読書会のことを指してゐる。昭和四十六年に布瀬君が入学した年に始まり、皿田君が四年生になった昭和五十二年までのほぼ七年間にわたって活動した学内団体である。「歴生会」では活動の成果を散逸させないために毎年「学びの道」と題した文集を皆で手分けして編集・出版を続けた。明治天皇の御製

なかばにてやすらふことのなくもがなまなびの道のわけがたしとて

を題名の起源ととさせていただいてゐた。今回の遺文遺歌のいくつかはこの文集から転載してゐる。当時、一緒に勉強してゐた友人の追悼文にもうかがはれるやうに歴生会での交流を通じてつちかった友情の世界は深くて強いものがあったし、十分に自慢しうるものである、と今でも思ってゐる。歴生会の会員の数はそれほど多くはなかったが、昭和五十九年に島崎君（享年三十歳）を事故で失ひ、平成八年には皿田君を失ってしまった。本当にをしみても余りある痛恨のきはみである。島崎君の時は私が中心になって遺稿集を編集したが皿田君の時にはそれができなくて申し訳ない思ひがしてゐた。数年前に札幌に出張した折、大町君から遺稿集を作る約束をしながら果たせないでゐる、と聞いたとき私も悔恨の情を抱いたことであった。今回、このやうにしてご霊前に捧げることができるのは大町君の熱い思ひのしからしめるところである。私はこの遺稿集をもって東工大歴生会の「学びの道」に新たな足跡をきざむことができたと思ってゐる。　歴生会の記述が中心となってしまったが、当時もさうであったが、歴生会は学外の友人の多くに支へられてゐた。今回の遺稿集編集にあたり、こころよく原稿をお寄せくださった同信諸友に感謝申し上げたい。皆様のはげましによって、大町君はお嬢さんが大学受験といふ家族の大仕事をかかへながらも、自らを奮ひたたせ続けることができたのだと思ふ。　末筆になりましたが、長内俊平先生には、ご揮毫を通じてなみなみならぬ激励を大町君に賜はりましたこと、本人に代って御礼申し上げる次第です。本当にお世話になりました。

つつしんで、本遺稿集を故皿田宏君のみ魂のみ前に捧げます。

合掌

皿田宏君を偲ぶ――遺文・遺詠ならびに追悼文・献詠集――

平成二十三年四月二十八日発行　一〇〇部　非売品

編集・発行　「東工大歴生会（歴史の中に生き方を探る会）」
編集委員　大町憲朗、奥冨修一、内田厳彦、布瀬雅義
東京都渋谷区東一―一三―一―四〇二号
社団法人・国民文化研究会　気付
電話　〇三―五四六八―六二三〇

印刷所
株式会社オーエム
大阪府大阪市東成区中道四―五―十四―一〇一